

■茅沼地区旧川復元計画



→ 旧河道の大部分が昔の姿に近い形で残っている茅沼地区の先行河川として実施し、その結果を基にその他の河川の旧川復元を段階的に行うこととした。

平成16年6月29日(火) 第2回 旧川復元小委員会が開催されました

■開催概要

「第2回旧川復元小委員会」が平成16年6月29日(火)に釧路地方合同庁舎にて開催されました。委員会には、構成員28名(個人12、団体10、オブザーバー3、関係行政機関3)のうち、9名(個人4、団体2、関係行政機関が3)が出席しました。また、一般の傍聴者も多数参加されました。当日は、神田委員長が欠席のため、議事の進行に先立ち、出席委員により委員長代理の互選が行われ、中村太士委員(北海道大学大学院 教授)が選出されました。その後、委員長代理の進行により、“釧路湿原の旧川復元計画について”と“既往の調査・検討結果(H15年度まで)”、“今後の調査・検討方針について(H16年度の予定)”、“全体構想との関わりについて”に関する討議が行われました。



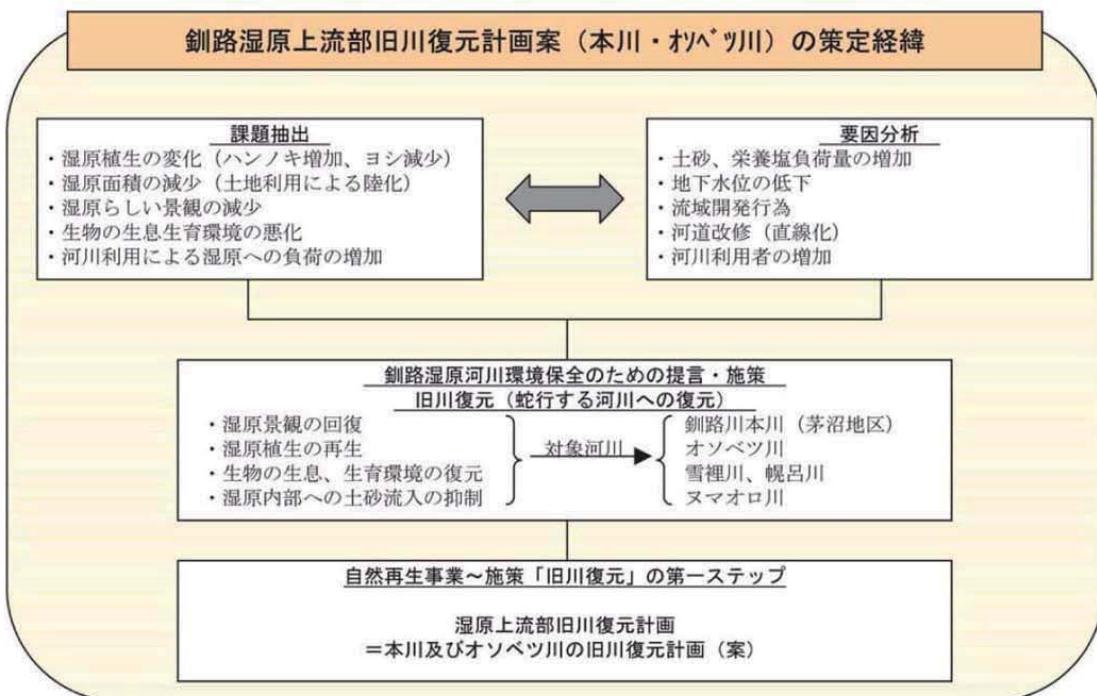
# 平成15年度までにわかったこと、 平成16年度以降の調査・検討方針をお知らせします。

## 釧路湿原の旧川復元計画について

釧路川本川(茅沼地区)では、旧川復元の先行河川として各種調査・検討を行ってきました。今後平成16年度中に

この地区の実施計画を策定していく予定です。なお、その際旧オソベツ川と一体的に考えていくこととなります。この地

区の結果をその他の河川の旧川復元に活かすこととなります。



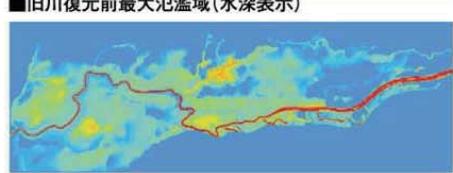
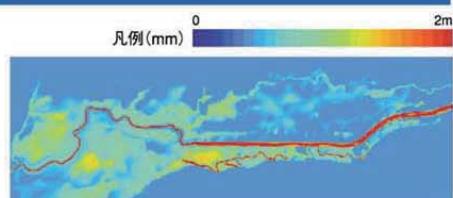
■釧路湿原上流部旧川復元計画案

## 平成15年度までの既往調査・検討成果について

### 復元河道計画

茅沼地区では釧路川本来の姿である蛇行河川への復元を計画の基本方針として平成11年度より調査・検討をしています。農地など周辺の土地利用や下流湿原の環境に影響を与えない復元方法、住民参加や地域との連携などを掲げた上で、平成15年度は(1)現況の環境調査(2)河道計画検討(地下水

予測、植生を変化予測など)(3)施工計画検討(試験掘削、環境配慮、残土処理)などの調査・検討を行いました。この結果、当時の状況に復元するためには新水路を埋め戻し、右岸残土を撤去することが効果的であり、望ましいことが分かりました。



### このようなことが話し合われました

- 委員長代理 ●委員 ●事務局 ●オブザーバー
- 現直線河道と旧川との間はどのような植生になっているのか。復元後は氾濫の頻度が高まることで、どんな植生に変わっていくのか。
- 旧川には、ヤナギ、ハルニレ、ヤチダモなどの河畔林があり、背後地は帰化種が大部分を占めている。直線河道には、ヤナギなどの河畔林が繁茂し、背後地は主にハンノキ群落である。
- 復元後、旧川沿いの地盤が高く、植生は今のままだと、余り変化が期待できないところがある。どうやって湿地の再生を講じていくか、今後の課題となっている。
- 今後、制約条件を整理して議論を収束していくべき

- ではないか。これまで相当調査をしているので、その中で言えることである程度議論が絞っていくのではないか。
- 河道復元計画の中に、町との協働体制があるが、具体的な考えがあれば聞きたい。
- 復元箇所上流の農地に影響を与えない復元計画とあるが、上流部分に件と農地防災事業区域があり、調整が必要である。また、五十石堤防は、実際は無堤防区間である。その辺りをどのようなイメージを持ったらいいか。
- 協働体制については、まだ具体的なものは無いが、今後、計画の段階から一緒にやっていきたい。
- 旧川復元区間の入り口付近ではスポット的には河水位は上がる。ただし、KP35付近より上流は水位上昇が無く、農地には影響は無い。

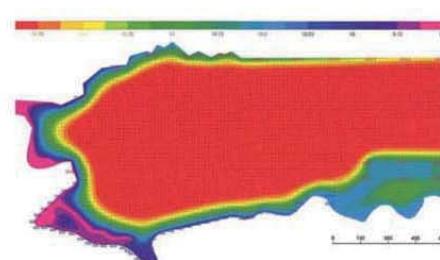
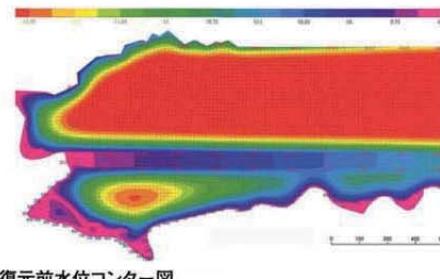
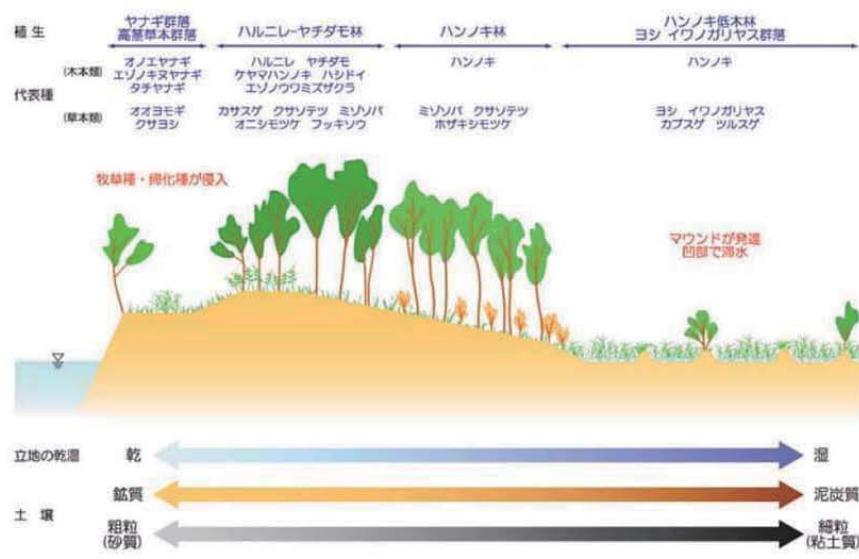
- 上流農地の区間は、いま無堤であるが、農地防災事業で地上げ等を行っているので、結果的に治水の安全度は上がる。
- 五十石堤防、下流右岸側の計画堤防というのは今後つくる予定はあるのか。
- 五十石堤防については、いつ実施するかは決まっていないが、計画上見込んでいる。また本川右岸側については、現在土地利用がなされていないことから、今後堤防はつくらず、逆に氾濫を許容することで冠水頻度を上げ、自然再生を図ることを考えている。なお、相対的に左岸側の治水安全度は上がる。
- オソベツ川の復元も考えているのならば、全体計画としての整合性をより早いうちに持っておいたほうがよい。

## I 旧川復元における効果の評価について

旧川復元の評価にあたり、勾配などの物理環境が旧川と類似し、釧路川の蛇行河川を呈している本川下流部をリファレンスサイト(評価対照区)に設定。湿原景観の回復・湿原植生の再生・生物生息環境の復元・土砂流入防止などの観点から比較評価を行いました。その結果、右岸残土の撤去と直線河道の埋め戻しを実施することによって、周辺地下水位が回復し、湿原へ流入する土砂は軽減されることが分かりました。

道の埋戻しを実施することによって、周辺地下水位が回復し、湿原へ流入する土砂は軽減されることが分かりました。その結果、右岸残土の撤去と直線河道の埋め戻しを実施することによって、周辺地下水位が回復し、湿原へ流入する土砂は軽減されることが分かりました。また、旧川付近の背後地の植生

は牧草種や帰化種が多く、リファレンスサイトの背後地(低層湿原)とは異なっていることも分かりました。今後は、周辺地下水位と植生の応答予測や堆積する土砂が植生に与える影響など検討していく予定です。



## I 施工計画

施工計画は、平成15年度に実施した試験掘削調査結果を反映させて策定します。試験掘削調査は旧川箇所で夏期・冬期の2回実施。河道内に生息する動植物の保全や施工時の留意点などを検討しました。今後は工区別・施工時期別の具体的な施工計画に基づく全体施工計画や、河道の維持、土砂流出防止に配慮した河岸保護工法を検討していきます。



- オソベツ川に関してはまだ十分な検討がなされていない。今後、直線河道右岸側への氾濫頻度を増やすとき、旧オソベツ川を一体的に考えなければならないということ。
- 直線河道の現状の交互砂州形態を、ずっと放置することによって、蛇行河川へ自然に復元するという意見があるが、委員会としての合意点を持つべきではないか。再び蛇行するにはどのぐらいの時間が必要なのか。
- 粗い計算で構ないので、検討していただきたい。
- 交互砂州の波長が旧川の蛇行の波長とほぼ同じように出てきており、いずれは戻ると思うが、直線河道ができて20年経っても蛇行し始めるまでは至っていないことから、100年ぐらいじゃ全然戻らないのでは。200年とか300年というオーダーになり、その前に釧路湿原がどうなるか。

- いろんな問題はあるということを列挙した上で、いま英知を集めめた結果から意見をまとめるべきではないか。何もしないという判断をするのか、もしくは積極的に蛇行復元をやっていくのかの分かれ道であり、意見合意の重要なところだと思う。
- 侵食のスピードは、土・水の粘着力だと河岸植生の根の影響などが関係しており、計算は簡単ではないが、予測は出来る。1000年という数字が出てくるかも知れない。
- 何らかの数字を押さえておくことは必要と考えている。例えば1000年で戻りそうになったときに、もうそのときには湿原は無かったという話になるのか、再生事業のモチベーションとして押さえておきたい。
- 旧河道の河床材料であるシルトを取り除くとなると、

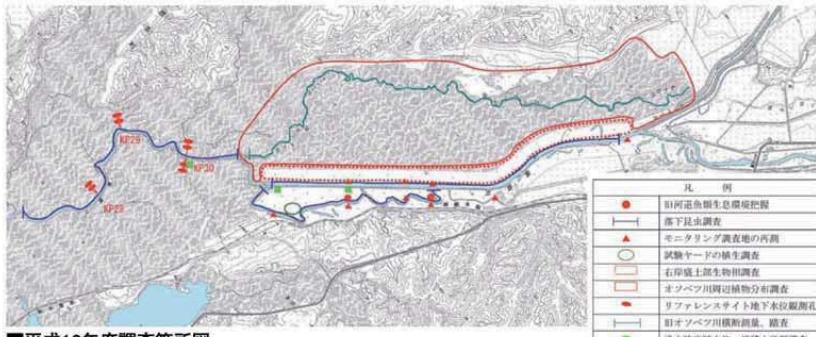
- それをどこを持って行くのかというのが問題になる。完全に取り除けないのなら、大量に下流へ出て行くことになるのでは。そうすると、工事によって泥水がいっぱい出るかもしれないが、それは当面この分がなくなる、開いただけは出てくるのは仕方ないということでやればいいのかもしれない。
- 旧川を復元することで湿原への土砂流出量は変わるものか。
- 今後調べて、報告する。
- 底泥を掘削した後の処理はどうするのか。
- 土壤検査を行った結果、環境に害を及ぼすような結果は出でないので、含水値を下げることや改良剤等を入れて通常の盛土等として有効利用していくことを考えている。

## 今後の調査・検討方針について

平成16年度は、オソベツ川を含む茅沼地区(釧路川本川)の全体計画について調査し、施策の効果予測や施工計画などを検討し、茅沼地区における当面の旧川復元計画(実施計画)を作成します。主な現地調査項目・検討項目は以下の表の通りです。

区分	調査及び検討項目
現地調査 計画	オソベツ川周辺環境調査、旧オソベツ川横断測量、リファレンスサイト調査(動物)、地下水調査、洪水時痕跡水位・堆積土砂厚調査、モニタリング調査地点の再測、釧路川右岸盛土上の環境、試験ヤードにおける植生の回復
解析・検討	複数案比較検討、直線部河道処理法の決定、旧川復元河川の河岸処理対策、旧川切替流入部形状の決定、湿原植生の再生、湿原への土砂流入の軽減、生物の生息生育環境、全体施工計画、残土処理計画

■今後の調査検討方針について(平成16年度の予定)



■平成16年度調査箇所図

### このようなことが話し合われました

●委員長代理 ●委員 ●事務局

●オソベツ川の方も一体的に調査をして、本川とオソベツ川の旧川復元を一体に考えるということは、自然再生の意味でも農地への影響を最小限化する意味でも、意義があることだと思う。

●旧オソベツ川に通水すると、釧路川本川の旧川復元計画が変わってくるものなのか。

●仮にオソベツ川の旧川復元をすれば、最小限の掘削断面ぐらいでおさまるのではないか。つまり、現況の河畔林に手をつけないような工法もあるのではないか。

●直線河道の右側に氾濫を許容したときに、旧オソベツ川を一体的に考える必要があるというレベルで、今すぐオソベツ川を復元するというわけではない。調査してみないと分からぬ話であり、あくまで検討範囲に含めているということである。なお、オソベツ川と釧路川本川のピークは重ならないため、必要な旧川断面は大きく変わらないと思う。

●調査を幾らやっても調査では分からぬことが次々出てくるわけで、もっと具体論に入るべきを感じている。例えば、落下昆虫調査はあるに越したことない資料はあるが、決定的な資料にはならない。

●食物連鎖を考えた場合、魚の餌の1つになる落下昆虫の調査は、そのポイントの定め方だと方法論はあるが、今年度調査計画に基づきお願いしたい。

●この落下昆虫を調べることで旧川を復元したと

きの効果が分かるのであればやるべきだ。

●例え工事により、落下昆虫に影響した場合、さらにそれを餌にするサケ科など魚類に影響していく。そういう意味で、基礎調査をやっておけば何かあったときに、判断する材料にはなる。

●いろいろな調査をやりながら工事も一部着手していかないと、いつまでも同じような論議が出てくる。ちょっとでも何か影響が出てきた場合には、一時中止するような余裕を持ちながら進めていく必要があるのでは。

●この落下昆虫調査をどう解析・評価するのか目的を示してほしい。全体がある方向に向ける(収斂する)ような形での情報収集をしていただきたい。

●平成13年3月に検討委員会提言が出てから、3年3ヶ月いろいろ調査をやってきたが、何かあったら困るということで調査がまた新しい調査を生み、確かに今まで何もできなかった。今後は小さな規模からでも実施していきたい。そうやって新しい技術を積み上げていくことも大事なのではないか。

●調査も大事だが、通水して問題点を調べて、他の復元4河川に結びつけていかないと、非常に時間がかかり過ぎるよう感じる。

●そろそろアクションに移す時期である。それをやめるという選択肢も一つのゼロアクションとしてはあり得るが、この委員会としてそうでないのなら、どういう方向に向かうかを少なくとも今年度中にはある程度の結論を持ちたい。

## 第2回 旧川復元小委員会 [出席者名簿(敬称略、五十音順)]

◎小委員会委員長代理

### ●個人

内島 邦秀

[北見工業大学 工学部 教授]

大山 仁美

[環境カウンセラー(事業者部門)]

清水 康行

[北海道大学大学院 工学研究科 助教授]

中村 太士 ◎

[北海道大学大学院 農学研究科 教授]

### ●団体

釧路市漁業協同組合

[参事／斎藤 隆夫]

釧路自然保護協会

[会長／高山 末吉]

### ●関係行政機関

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部  
[治水課長／平井 康幸]

環境省 東北海道地区自然保護事務所  
[所長／渡邊 純男]

標茶町

[建設課長／山口 登]

### 資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

<http://www.kushiro-wetland.jp/>

### ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。

電話・FAX・Eメールにて事務局まで御連絡ください。

## 釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

TEL (0154) 23-1353

FAX (0154) 24-6839

[E-mail] [info@kushiro-wetland.jp](mailto:info@kushiro-wetland.jp)



古紙配合率100%再生紙を使用しています